

薬学の壁

龍谷大学 先端理工学部 教授 岩澤 哲郎



私は薬学研究奨励財団から平成20年度研究助成を受けました。そのご縁でこの度、本欄「薬学への期待」の執筆の機会に恵まれました。関係の皆様には深く感謝申し上げます。浅学の身ではありますが、薬学へ期待することを経緯とともに随想させていただきます。

私の父と叔父は製薬会社に勤めておりました。私が10代半ばの頃には、父からは生化学の視点に立った薬事業の意義を、叔父からは薬理学の視点に立った創薬の成功体験を耳にしていました。これらの影響を受けて薬学に対する憧れが強くなり、後年、京都大学薬学部に入學し、そのまま修士課程（有機合成・富岡清先生）に進みました。しかし、その頃になると、迷いを自覚するようになります。薬学という総合科学のカバーする範囲があまりにも広く深いため、よほど幸運でない限り自分の志を達成することは難しい、という思いにとらわれてしまいました。研究者として自己実現したい欲と、病気で苦しむ人を助けたい利他の精神との関係を二律背反に捉えてしまい、意志を純化できない自分に苛立ちを覚えていた節もありました。やがて「自分は一体何をすべきか？」という問いに対し、基礎化学に没頭しようと判断し、薬学部を離れる決断をしました。この際、恩師・富岡先生から教わった「研究者をやるならば哲学を大事にしなさい」という言葉が、大きな支えになりました。その後、理学部（北大・博士・触媒化学）、Dept. of Chemistry（米国スクリプス研・ポスドク・超分子化学）、工学部（徳島大・助教・構造有機化学）へと異動し、平成21年度に理工学部（現職）で独立をしました。

薬学部を離れて20年以上が経ちますが、接した

人々は理・工・農学部等出身の教員や学生の方々にした。その間、気になったことが二つあります。一つは「薬学部のご出身ですか、それは珍しいですね」とたびたび言われることです。薬学部には独特の学問的教養を身につけられる何かがあると映るのでしょうか。もう一つは、薬学用語が節操のない使われ方をしていることです。使用に疑問を感じることもさえあります。これら二点は、薬学の知識体系が徐々に他分野へ浸透しつつある傍証とも理解できますが、「隔たりのある分野」であることの裏返しかもしれません。薬学は総合科学としての知ですから、理・工・農学部出身の方が参入されることは良いことです。一方、薬学部出身者が理・工・農学部などの所属先へ移った例はあまり耳にしません。移動が増えれば分野としての隔たりが埋まり、薬学の発展を展望できるのではないのでしょうか。

現職では、仕事柄、医薬品のプロセス化学業界の企業さまと接する機会が多くあります。薬学部とは異なる出身の方が大勢おられる業界です。医薬品のプロセス化学という言葉は90年代の薬学部では耳にしませんでしたが、この業界の方々は今から変わらず医薬品製造を支える堂々たるプロであり、薬学の範疇の核心をなす職業です。そのモノづくりの知恵に触れるたびに、鮮烈な感銘を受けます。

養老孟司の著書「バカの壁」の末尾の一節『一元論にはまれば、強固な壁の中に住むことになります。それは一見、楽なことです。しかし向こう側のこと、自分と違う立場のことは見えなくなる。当然、話は通じなくなるのです』を思い出します。薬学部の修了生が多様な所属へ移られ、薬学の知が適切に広がることを期待しております。